

友人に対する感情と必要なサポートとの関係

— 中学生, 大学生を対象として —

蔵永 瞳・水野 正憲¹

(2011年10月6日受理)

The Relationship between Feeling for Friends and Needs for Support
— A survey of middle-school and university students —

Hitomi Kuranaga and Masanori Mizuno¹

Abstract: The purpose of this study was to investigate the relationship between the feeling for friends and the needs for support from them. In a survey, middle-school and university students were asked to rate on two scales. The first scale measured feelings for friends: "Reliance and security," "Anxiety," "Independence," "Rivalry," and "Conflict". The second measured needs for different kinds of supports from friends: "Acceptance," "Belongingness," "Admiration." The results of a regression analysis showed that the effect of feelings for friends on the needs for supports had a significantly different pattern between middle-school and university students. For middle-school students, the results showed that only "Reliance and Security" increased the needs for supports from friends. On the other hand, for university students, the results were more complex. For example, not only "Reliance and security" but also "Anxiety" and "Rivalry" increased some kinds of needs for support. This different pattern of friendship at the two stages is discussed.

Key words: relationship with friends, feeling for friends, support from friends, middle-school students, university students

キーワード: 友人関係, 友人に対する感情, 友人サポート, 中学生, 大学生

問 題

青年期における友人サポートの重要性

青年期は, 親に依存的であったそれまでの段階から, 親から離れ, 精神的に自立し始める段階である。このようななかで, 青年は, 親よりも友人と親密に関わるようになり (たとえば Hunter & Youniss, 1982), 友人からより多くのサポートを受けるようになる (たとえば尾見, 1999)。このことから, 友人からのサポートは, 青年が日常生活を送る上で非常に重要な役割を担っていると言える。

友人に抱く感情の複雑さ

ところで, 青年が友人に抱く感情は非常に複雑である。榎本 (1999) は, 青年期初期から後期にかけての学生 (中学生, 高校生, 大学生) が友人に抱いている感情を収集・整理した。そしてその結果, 「信頼・安定」, 「不安・懸念」, 「独立」, 「ライバル意識」, 「葛藤」の5種類が示された。この結果から, 青年が友人に抱く感情には, 「信頼・安定」といったポジティブなものだけでなく, 「不安・懸念」, 「葛藤」といったネガティブなものも含まれていると言える。

全ての友人からサポートを必要としているのか

以上のように, 友人に抱く感情が一様にポジティブではないことを考慮すると, 青年が全ての友人からサポートを必要としているとは想像し難い。その友人か

¹岡山大学大学院教育学研究科

らサポートを必要とするか否かは、抱く感情によって異なるだろう。たとえば、信頼している友人からはサポートを必要としても、関係の中で葛藤を感じている友人からはサポートを必要としないかもしれない。

このように青年期においては、ある友人からはサポートを必要とし、ある友人からはサポートを必要としない、ということが想定される。このとき、もし“この友人にサポートしてほしい”と思っているにも関わらず、サポートを受けることができなかつたり、逆に“この友人からはサポートされたくない”と思っているにも関わらず、サポートを受けてしまうことは、友人との関係を悪化させたり、ストレス反応を生じさせる可能性がある。青年期における効果的なサポートを探る上ではまず、どのような感情を抱く友人からサポートを必要とするのか、検討しておく必要がある。

サポートの多様性

これまでのソーシャル・サポート研究によると、サポートの種類は、労力や金銭的・物質的資源を提供するものや、余暇活動と一緒に時間を費やすもの、情報を提供するもの、情緒にうったえるものまで様々である（たとえば和田，1989）。このことを考慮すると、たとえば、友人にライバル意識を感じている場合には、一緒に時間を過ごすようなサポートは必要としないが、互いを認め合い評価するようなサポートは必要とする、というように、サポートの種類によって感情との関係が異なることが予測される。友人に抱く感情と、必要なサポートとの関連を検討するにあたっては、サポートの種類を考慮した検討が必要であると考えられる。

学校段階によって結果が異なる可能性

同じ青年期という段階でも、友人関係のあり方は学校段階に伴って変化する。落合・佐藤（1996）は、青年期初期から後期にかけての学生（中学生、高校生、大学生）を対象に、友人とのつきあい方について調査を行った。その結果、青年期初期にあたる中学生では浅く広いつきあい方が多いが、高校生、大学生と後期になるにしたがって、深く狭いつきあい方が多くなることが示された。

学校段階によって友人関係のあり方が異なるという上記の知見を考慮すると、友人に抱く感情や、必要なサポート、さらにそれらの関連も、学校段階で異なることが予想される。現に、友人に抱く感情について検討した榎本（1999）では、学校段階によって各種の感情の強さが異なることが既に示されている。

本研究の目的

以上の議論をまとめると、友人に抱く感情と、必要なサポートとの関係を検討するにあたっては、それら

双方の種類を考慮する必要があると言える。そしてその際には、学校段階による違いについても検討を行う必要がある。しかし、これらの点を十分に考慮しながら、青年期における友人サポートのあり方を検討した研究はこれまでみられない。

そこで本研究では、学校段階ごとに、友人に抱く各種の感情が、各サポートの必要性に及ぼす影響を検討する。学校段階としては、中学校と大学を扱うことで、青年期の初期と後期の違いを検討する。

方 法

調査対象者と手続き

中学生107名（男性56名、女性50名、不明1名）、大学生175名（男性57名、女性116名、不明2名）を対象に、質問紙調査を実施した。各学校段階における調査対象者の学年は、中学生では1年生38名、2年生37名、3年生30名、不明2名、大学生では1年生169名、2年生2名、3年生2名、4年生1名、不明1名であった。

質問紙の構成

質問紙では、対象者自身の友人を1人思い浮かべてもらい、その友人に関して、以下に示す2種類の質問項目に回答するよう求めた。

友人に対する感情 中学生から大学生にかけての友人に対する感情は、「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」、「ライバル意識」、「葛藤」の5因子に整理される（榎本，1999）。本研究ではこの結果を参考に、友人に対する感情として上記の5種類を測定した。測定項目としては、榎本（1999）で各因子に対して負荷量の高かった順に上位3項目を選出した。ただし同研究の尺度項目には、「友達と違う意見でも自分の意見はきちんと言う」など、友人に対する感情ではなく、行動に関する項目も含まれている。本研究では友人に対する感情に特化した検討を行うため、同研究の尺度から行動を測定していると考えられるものは除外した。その際、「独立」に関しては、当該因子に高く負荷している3項目のうち、2項目が行動を測定していると考えられるものであったため、1項目のみを測定に用いた。また、中学生と大学生双方に適した内容になるよう、細かい表現を修正した。具体的な測定項目は表1に示す。回答は、「あてはまらない（1点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「ややあてはまる（3点）」、「あてはまる（4点）」の4段階であった。

必要なサポート 必要なサポートとして様々なものを測定するため、久田・千田・箕口（1989）、嶋（1992）、和田（1989）におけるソーシャル・サポートを測定す

る尺度から、25項目を選出して使用した。項目の選出は、(a) 多くの友人からではなく、一人の友人から受けるサポートについての内容であり、(b) 選出した他の項目と内容が異なる、という2つの観点から行った。なおこの尺度に関しても、中学生と大学生双方に適した内容になるよう、細かい表現を修正した。具体的な測定項目は後の表3で示す。回答は、「必要ない(1点)」「どちらかというとな必要ない(2点)」、「どちらかというとな必要(3点)」、「必要(4点)」の4段階であった。

結果

分析に使用する項目の検討

友人に対する感情 測定した5種類の感情のうち、複数の項目を用いて測定した4種類(信頼・安定、不安・懸念、ライバル意識、葛藤)に関して、学校段階ごとに α 係数を算出した。その結果、中学生における不安・懸念と、ライバル意識の α 係数が著しく低い値となった($\alpha_s < .535$)。そこで、それら2種類の感情に関しては、測定項目のうち、当該感情を最も包括的に表現していると考えられる項目の得点を以降の分析で用いることとした。中学生、大学生いずれに関しても α 係数が.60以上であった感情(信頼・安定、葛藤)に関しては、測定した項目の得点を合算平均して分析に用いた。なお、単項目で測定した独立に関しては、その項目の得点を分析に使用した。以降の分析で使用される具体的な項目については表1に、各感情の得点は表2に示す。

必要なサポート 友人から必要とするサポートを測定した全てのデータに対して、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、因子の解釈の容易さから3因子解が採用された。第1因子は、“普段から私の気持ちをよく理解してくれる”、“良いところも悪いところもすべて含めて、私の存在を認めてくれる”など、自身のことを深く理解し、受容してもらう内容の項目が高い正の負荷を示したため、受容サポートと命名した。第2因子は、“一緒に遊びにでかけたりする”、“おしゃべりをして楽しい時を過ごす”など、同じ活動を一緒に行い、所属感を高める内容の項目が高い正の負荷を示したため、所属サポートと命名した。第3因子は、“何かにつけ私をほめたたえてくれる”、“私を高く評価してくれる”など、自身を評価し、称賛してもらう内容の項目が高い正の負荷を示したため、称賛サポートと命名した。なお以降の分析では、共通性が.30以上かつ、いずれかの因子に対して負荷量の絶対値が.40以上の項目を選出し、そ

れらの得点を合算平均した値を用いた。各サポートの得点に関して学校段階ごとに α 係数を算出した結果、著しく内的一貫性の低いものはなかった。探索的因子分析の結果及び以降の分析で使用する項目については表3に、各サポートの得点および α 係数は表2に示す。

学校段階による各変数の得点の違い

中学生と大学生とで友人に対する感情と、必要なサポートの得点異なるのかを検討するため、それらの各変数を従属変数、学校段階を独立変数とする t 検定を行った。その結果、友人に対する感情は、いずれに関しても有意な差は認められなかった。一方、必要なサポートに関しては、受容サポートおよび所属サポートの得点が、中学生よりも大学生の方が高いことが示された(受容サポートで $t(165.40) = -3.47, p < .001$; 所属サポートで $t(186.27) = -2.07, p < .05$)。称賛サポートに関しては、有意な差は認められなかった。

表1 友人に対する感情の測定項目
(模本, 1999を一部改変)

信頼・安定
<input type="radio"/> 友達とは気持ちに通いあっている
<input type="radio"/> 心から友達を親友を言える
<input type="radio"/> 友達は私のことならだいたい知っている
不安・懸念
<input type="radio"/> 自分が本当に友達と思われているか気になる
<input type="radio"/> 自分が友達にどう思われているか気になる
<input type="radio"/> 友達の考えていることがわからなくなって不安になる
独立
<input type="radio"/> 友達と意見が対立しても自分をなくさないでいられる
ライバル意識
<input type="radio"/> 友達よりいい仕事につきたい
<input type="radio"/> 友達には様々な面で負けたくない
<input type="radio"/> 友達の方がテストの点がいいと不安になる
葛藤
<input type="radio"/> 友達といると自分のやりたいことができない
<input type="radio"/> 友達のやっていることに引きずりこまれて困る
<input type="radio"/> 友達の誘いを断れず困る

注) 項目左の○は、後の分析に使用したことを示す。

表2 各変数の平均値(標準偏差), $< \alpha$ 係数 $>$

	中学生	大学生
友人に対する感情		
信頼・安定	2.97 (0.66) $<.616>$	3.12 (0.60) $<.754>$
不安・懸念	3.17 (0.96)	3.03 (0.93)
独立	3.03 (0.79)	3.01 (0.73)
ライバル意識	2.76 (1.01)	2.61 (0.92)
葛藤	1.92 (0.73) $<.696>$	1.81 (0.60) $<.676>$
必要なサポート		
受容サポート	2.99 (0.69) $<.877>$	3.33 (0.46) $<.810>$
所属サポート	3.27 (0.61) $<.725>$	3.41 (0.48) $<.762>$
称賛サポート	2.45 (0.96) $<.634>$	2.65 (0.89) $<.822>$

注) α 係数を記していない変数は、単項目の得点であることを示す。

表3 友人から必要とするサポートの因子分析結果

	F1	F2	F3	<i>h</i> ²
F1: 受容サポート (回転前の固有値:7.816)				
○ 普段から私の気持ちをよく理解してくれる。	.874	-.115	-.003	.636
○ 良いところも悪いところもすべて含めて、私の存在を認めてくれる。	.806	-.037	-.152	.502
○ 私の考え方が間違っているときは率直に言ってくれる。	.804	-.042	-.214	.465
○ 私が不満をぶちまけたいときには、はげ口になってくれる。	.572	-.054	.088	.346
○ 私が何かを成し遂げたとき、心からおめでとうと言ってくれる。	.518	.237	-.065	.443
○ 私が元気がないと、すぐ気づいて気づかってくれる。	.518	-.061	.279	.449
○ 私の達成できたことを、自分のことのように誇りに思ってくれる。	.497	-.057	.354	.511
○ 私が落ち込んでいると、元気づけてくれる。	.463	.283	.041	.511
友達から問題解決のためのよいアイデアを得る。	.400	.163	.093	.343
友達から、進路や就職についてアドバイスをもらう。	.295	.075	.059	.151
F2: 所属サポート (回転前の固有値:1.771)				
○ 一緒に遊びにでかけたりする。	-.113	.813	-.142	.457
○ おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす。	.136	.759	-.264	.545
○ 一緒に何かをしようと誘ってくれる。	.085	.520	.108	.422
○ 一緒に昼食を食べる。	-.093	.494	.208	.325
○ 病気で欠席したとき、授業の内容を教えてくれる。	.127	.435	.109	.361
プレゼントをあげたり、もらったりしあう。	-.016	.387	.246	.303
私の話を真剣に聞いてくれない。	.005	-.372	.189	.095
私が何をしたらよいか分からないとき、それを教えてくれる。	.205	.347	.153	.377
共通の趣味や関心を持っている。	.090	.315	.184	.263
うわさ話など私の知らないいろいろな事を教えてくれる。	-.132	.305	.222	.146
私が持っていないものを気軽に貸してくれる。	.104	.232	.164	.185
F3: 称賛サポート (回転前の固有値:1.527)				
○ 何かにつけ私をほめたたえてくれる。	-.039	-.112	.803	.531
○ 私を高く評価してくれる。	-.127	-.004	.797	.536
私が急にお金が必要になったとき貸してくれる。	.031	-.152	.412	.133
私の個人的問題について話し合う。	.221	.108	.337	.331
	F1	—		
	F2	.689	—	
	F3	.558	.554	—

注) 項目左の○は後の分析で使用した項目であることを示す。

表4 友人に対する感情が必要なサポートに及ぼす影響 (偏回帰係数)

	信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤	<i>R</i> ²
中学生						
受容サポート	.512 ***	.133	.069	-.058	.036	.322 ***
所属サポート	.459 ***	.175	.046	.072	-.069	.293 ***
称賛サポート	.116	-.019	.170	.059	.030	.054
大学生						
受容サポート	.351 ***	.327 ***	.059	.001	-.167 *	.240 ***
所属サポート	.237 **	.185 *	.128	.131	-.008	.126 ***
称賛サポート	.265 **	.050	-.166 *	.195 *	.125	.150 ***

*** *p* < .001, ** *p* < .01, * *p* < .05

友人に対する感情が必要なサポートに及ぼす影響

友人に対する感情が、その友人から必要とするサポートに及ぼす影響を検討するため、3種類のサポート(受容サポート、所属サポート、称賛サポート)それぞれを目的変数とし、5種類の感情(信頼・安定、不安・懸念、独立、ライバル意識、葛藤)を説明変数

とする重回帰分析を行った(表4参照)。

分析の結果、中学生においては、友人に対して信頼・安定を強く感じるほど、その友人から受容サポートや所属サポートを必要とすることが示された。また、称賛サポートはいずれの感情からも有意な影響を受けていなかった。さらに、信頼・安定以外の4種類の感情

は、いずれのサポートにも有意な影響を及ぼしていなかった。

大学生においては、友人に信頼・安定を強く感じるほど、その友人から受容サポート、所属サポート、称賛サポートを必要とすることが示された。また、不安・懸念を強く感じるほど、受容サポートや所属サポートを必要とすることや、独立した関係にあると感じるほど称賛サポートを必要としないこと、ライバル意識を強く感じるほど称賛サポートを必要とすること、葛藤を強く感じるほど受容サポートを必要としないことが示された。

考 察

学校段階による友人に対する感情の違い

本研究では、中学生および大学生に関して、友人に対する感情と必要なサポートとの関連を検討した。そしてその際には、友人に対する感情と必要なサポートそれぞれに関して、中学生・大学生間における得点の比較も行った。その結果、友人に対する感情に関しては、いずれの感情でも有意な差が認められなかった。このうち信頼・安定や葛藤に関しては、同様の検討を行った榎本（1999）でも同じ結果が得られている。これより、友人を信頼する気持ちや、友人との関係の中で葛藤を感じる気持ちについて、中学生と大学生の間で強さに違いがないことは、調査対象者を変えても再現される頑健な結果であったと言える。

一方、不安・懸念やライバル意識、独立に関しては、本研究とは異なり、榎本（1999）では中学生と大学生との間に有意な差が見出されている。このように2つの研究間で異なる結果が得られたことは、上記3種類の感情の強さに関して、中学生・大学生間での異同が、調査対象者を変えることで結果が変わるような不安定なものであることを示唆しているのかもしれない。ただし、本研究と榎本（1999）では、不安・懸念やライバル意識、独立を測定した尺度が若干異なる。そのため両研究の結果の違いは、尺度項目の違いに起因している可能性もある。この点に関しては今後更なる検討が必要であろう。

学校段階による必要なサポートの違い

友人からのサポートに関しては、受容サポートおよび所属サポートが、中学生よりも大学生で必要とされていることが示された。青年期においては、親からの精神的な自立に伴って、友人からより多くのサポートを受けようになる（たとえば尾見，1999）。このことから、大学生は、親からのサポートが減っていく分、友人からのサポートがそれ以前にも増して必要になっ

てくるのだと推察される。

一方、称賛サポートに関しては、中学生と大学生との間に有意な差は認められなかった。加えて、他のサポートと比べて得点が低い傾向にあった。称賛サポートは、“何かにつけ私をほめたたえてくれる”、“私を高く評価してくれる”など、自身のことを友人が褒め称える内容のサポートである。このようなサポートは、中学生でも大学生でも、友人からあまり必要とされていないと言える。

友人に対する感情が必要なサポートに及ぼす影響

本研究の主目的である、友人に対する感情が、その友人から必要とするサポートに及ぼす影響に関しては、中学生と大学生とでパターンが異なることが明らかとなった。まず中学生に関しては、信頼・安定が受容サポートおよび所属サポートの必要性を促進していた以外に、有意な影響はみられなかった。つまり、必要なサポートに対して有意な影響を示した感情は、信頼・安定のみであった。これより中学生は、信頼している友人からサポートを必要としており、それ以外の感情（不安・懸念、ライバル意識、独立、葛藤）をどんなに感じようと、サポートを必要とするか否かとは関連がないと言える。

また、中学生においては、いずれの感情も称賛サポートの必要性を有意に説明しなかった。中学生においては、友人に対してどのような感情を感じていようと、称賛サポートを必要とするか否かとは関連がないと言える。

以上のように中学生に関しては、友人に対する感情と、必要なサポートとの間に非常にシンプルなパターンが示された。これとは対照的に、大学生ではより複雑なパターンが示された。具体的にはまず、信頼・安定は、3種類のサポート（受容サポート、所属サポート、称賛サポート）全ての必要性を促進していた。信頼している友人からは、種類を問わず、いずれのサポートも必要としていると言える。

また、不安・懸念は受容サポートおよび所属サポートの必要性を、ライバル意識は称賛サポートの必要性を促進していた。大学生においては、友人との関係に不安を感じると、自分を受容してもらったり、一緒に時間を過ごすようなサポート、言い換えれば、不安・懸念を解消できるようなサポートをその友人から必要とする傾向があると言える。また、ライバル意識に関する結果は、“様々な点で負けたくない”と感じている友人に対して、回避するのではなく、むしろ積極的に互いを認め合い、良い関係を築きたいと考えていることを示唆しているのかもしれない。

さらに独立は称賛サポートの必要性を、葛藤は受容

サポートの必要性を抑制することが示された。独立に関する結果は、独立した関係にある友人とは、“何かにつけ私をほめたたえてくれる”といった過度に迎合的な行動をとられることで、その関係を壊したくないという考えが表れているのかもしれない。また、受容サポートは、他の2種類と比べて内的に深い関わりを持つような内容のサポートである。このことを考慮すると、葛藤に関する結果は、一緒にいると自分のやりたいことができないような友人とは、深い関わりを持ちたくないという考えの表れなのかもしれない。

大学生に関する以上の結果の中でも、信頼・安定がサポートの必要性を促進する傾向は中学生と同様であったが、不安・懸念や独立、ライバル意識、葛藤が各サポートの必要性に影響を及ぼす点は中学生の結果とは大きく異なっていた。落合・佐藤(1996)によると、青年期初期から後期にかけては、友人関係が広いものから狭いものに変化していくという。このことと本研究の結果とを合わせて考えると、中学生は様々な友人とつきあいがあがりながらも(広い関係ながらも)、サポート源として必要としているのは信頼している一部の友人のみで、他の友人に関しては、特にどのようなサポートが必要、ということを考えないのかもしれない。これに対して大学生は、つきあいのある友人は少ないものの(狭い関係ながらも)、不安・懸念を感じるような友人からは受容感や所属感が得られるようなサポートを、ライバル意識を持っている友人からは称賛が得られるようなサポートを、というように、自身の抱えている感情に合わせて必要なサポートを意識的に選択している可能性がある。

本研究の限界と課題

本研究では友人に対する感情のうち、不安・懸念や、ライバル意識に関しては、測定に使用した尺度で十分な内的一貫性が示されなかった。そのため分析の際には、各感情に関して代表的な項目を1つ選び、その得点に関して検討を行った。また独立に関しては、元尺度である榎本(1999)において、感情にあたる内容が1項目のみであったため、単項目のみで測定・検討を行った。これらの変数に関しては、今後、項目を改善、増量するなど、測定に用いる尺度を改善した上で、本研究と同様の結果が得られるか再度検討を行う必要があると考えられる。

また本研究では、青年期の初期と後期にあたる中学生と大学生とを対象に調査を行ったが、青年期における変化をより詳細に捉えるためには、高校生を対象とした検討も必要であろう。本研究によって、中学生と大学生とでは友人に対する感情と、その友人から必要とするサポートとの関係のパターンが異なることが示

されたが、高校生についても同様の検討を行うことによって、パターンの変化がどのような過程を経て起こっているのかを明らかにすることができるだろう。

さらに、本研究では横断調査による検討を行ったが、厳密にパターンの変化を検討するためには、今後、縦断調査による検討を行うことが望ましいと考えられる。

最後に、本研究最大の課題は、必要なサポートが実際に与えられたときや、与えられなかったときの効果についてである。本研究では、“この友人からサポートがほしい”と思っているにも関わらず、サポートが提供されないことで、友人との関係が悪くなったり、ストレス反応が生じる、というように、友人から必要としているサポートと、実際に得られたサポートとが不一致のときネガティブな影響があることを想定して検討を行った。しかし、この点に関しては想定のみで、推測の域を出ない。効果的な友人サポートについて考える上では、必要なサポートが友人から得られなかったとき、また、必要としていないサポートを友人から受けた際の、友人との関係やストレス反応についても実証的な検討を行っていく必要があると考えられる。

【引用文献】

- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博(1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- Hunter, F. T., & Youniss, J. (1982). Changes in functions of three relations during adolescence. *Developmental Psychology*, 18, 806-811.
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 尾見康博(1999). 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.
- 嶋 信宏(1992). 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 和田 実(1989). ソーシャル・サポート(Social Support)に関する一研究 東京学芸大学紀要 第1部門, 40, 23-38.

(主任指導教員 樋口匡貴)